

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	モンゴル医療協力の報告
別タイトル	Report of Mongolian Medical Co operation
作成者（著者）	八木, 文彦
公開者	東邦大学医学会
発行日	2019.12.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 66(4). p.212 216.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	報告
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2019 027
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD44235253

モンゴル医療協力の報告

八木 文彦

東邦大学医療センター大橋病院眼科

要約：モンゴルは親しみのある国だが、詳細を知る人は少ない。今回我々はモンゴル第3の都市エルデネトにある Medipas Hospital に医療協力目的で2回訪問したので報告する。1回目の訪問は見学が目的であったが、診療も行うこととなり、2回目の訪問の際には診療も可能な就労ビザを取得して臨んだ。60人程度の診察を行ったが外国で診療を受けることが多いためか自分がどのような診療を受けたのか理解していない患者が多い印象を受けた。また、日本から眼内レンズと手術器械を持ち込み9例の白内障手術を行った。現地の医師向けに講演も行った。優秀なモンゴル人通訳のおかげで診療も講演も問題なく終えることができた。眼科以外に放射線科（画像診断、遠隔診断）、消化器内科（超音波検査）、循環器内科、病院病理部（病理診断）でも既に医療協力が始まっている。我々の3回目の訪問も既に予定されており、今後ますます交流が盛んになると考えられる。

東邦医学会誌 66(4)：212-216, 2019

索引用語：モンゴル、医療協力、エルデネト鉱山、Medipas Hospital、中央アジア

はじめに

東邦大学はモンゴルの3つの病院及び大学と国際交流協定(MOU)を結んでいる(Table 1)。

今回我々はモンゴル第3の都市であるエルデネトにある Medipas Hospital (MOU未締結)に医療支援をするため2017年8月と2018年8月の2回訪問した。今までの成果及び今後の展望について概説する。

モンゴルの概要

我々日本人にとって同じアジアの国として、また生まれてから3歳頃までお尻に蒙古斑を認めることなどからルーツが同じと考えられるモンゴルに対し親しみを感じる人が多いと思われるが、モンゴルを詳しく知る人は多くないと思われる。源義経が兄頼朝に追われ奥州を抜けてモンゴルに渡りチンギスハーンになったという伝説や、元寇(文永の役・弘安の役)で九州が二度にわたり侵略されそうになったにもかかわらず、二度とも「神風」が吹いて蒙古軍を退けたという歴史は有名だがそれ以外にモンゴルの事は

ほとんど知られていないのが現状と思われる。

日本とモンゴルが外交関係を樹立したのは1972年であり、その当時のモンゴルは社会主義国家であった。1992年に民主化されたが、経済は天然資源に頼っており、主な資源は石炭、銅、モリブデン、鉄鉱石などである。農牧業が主要産業のイメージが強いが鉱産物輸出が外貨獲得のほとんどを占めている。

モンゴルの正式名称はモンゴル国である。面積は156万6600平方キロメートルで日本の約4倍。人口は約318万人(2017年末現在)。首都ウランバートルの人口は約150万人で公用語はモンゴル語、キリル文字を使用している。通貨はトゥグルグ(100トゥグルグ=約4.44円)だが日本では両替できない。成田国際空港からウランバートルのチンギスハーン国際空港までMIATモンゴル航空が毎日直行便を運航している。日本との時差は1時間。

今回訪れたエルデネトはウランバートルから北西に約350キロメートルにあるモンゴル第3の都市でありウランバートルから車で約6時間、列車だと11時間を要する。人口は約10万人で1950年代にポーランド人によって銅鉱

〒153-8515 東京都目黒区大橋 2-22-36

*Corresponding Author: tel: 03-3468-1251

e-mail: fyagi@med.toho-u.ac.jp

DOI: 10.14994/tohoigaku.2019-027

受付：2019年5月28日、受理：2019年7月3日

東邦医学会雑誌 第66巻第4号、2019年12月1日

ISSN 0040-8670, CODEN: TOIZAG

Table 1 東邦大学が国際交流協定を結ぶモンゴルの病院・大学

病院・大学	締結年	学部
National University of Mongolia (モンゴル国立大学)	2007年 2012年	学部間 (薬学部) 大学間
Mongolian National University of Medical Science (国立モンゴル医科大学)	2013年	学部間 (医学部)
The First Central Hospital of Mongolia (モンゴル第一病院)	2015年	学部間 (医学部)



Fig. 1 Medipas Hospital の Facebook による広報活動

左：大森病院眼科教授堀裕一先生

右：著者

モンゴル語（キリル文字）を日本語に翻訳したものを下記に示す。

日本人医師による健診・眼科総合健診・水晶体手術 硝子体の健診・診断・治療

2018年8月27・28・29日

堀 裕一 東邦大学病院 眼科医 博士・教授 水晶体手術・硝子体手術

八木 文彦 東邦大学病院 眼科医 博士・准教授 水晶体手術・硝子体手術

脈が発見され、鉱山として発展した都市である。この鉱山からは銅・モリブデン・レアメタル等が産出され、モンゴルのGDPの10%以上をこの街で稼ぎ出している。

医療協力の現状

2017年2月15日～24日までエルデネットのMedipas Hospital眼科よりバトチメグ先生が大橋病院眼科に見学に来院したことが大橋病院眼科からの医療支援の発端である。その後2017年8月26日～9月2日に大橋病院教育支援管理部秋元吾郎課長補佐を隊長に放射線部部長尚史主任技師、鮫島早苗看護師(当時すでに退職)、私の4名でMedipas Hospitalを訪れた。Medipas Hospitalは鉱山で働く約8千人の労働者の健康診断を毎日50人～100人行っており健康診断で経営が成り立っているようである。現在は病床数20床とこじんまりした病院だが敷地面積は38ヘクタールと広大である。エルデネットの鉱山は今後30年で掘りつくしてしまうと言われており、それまでに鉱山以外の産業

が発展しないと街が廃れてしまうという問題を抱えているため、医療を新たな街の産業にするべく医療都市を目指している街である。2017年に訪れた際の予定では見学がメインであり、我々の病院と異なった部分を紹介するとまず病院入口の受付横にクロークがあり冬季は寒いのでほとんどの患者はコートを着て来院するが、脱いで持ち運びする必要のないようにクロークに預けることができる。また広報も充実しており3名の広報専属スタッフがあり、病院内に数か所設置されたモニターに各診療科の医師が各科の特徴を説明するビデオが流されていた(モンゴル語のため内容の詳細は不明)。また2018年に訪問する前には我々が診察に訪れることを知らせるためにFacebookによる広報活動が行われていた(Fig. 1)。

2017年の訪問では診療は行わない予定であったが、診察を希望する患者が何名か受診したため急遽外来診療を行った。また手術も見学又はアドバイスをする程度の予定であったが、私が訪問した間に予定されていた白内障手術



Fig. 2 ダンバダールジャー・バッチジャルガル駐日モンゴル大使就任レセプション@モンゴル国大使館

左：ダンバダールジャー・バッチジャルガル駐日モンゴル国特命全権大使

中央：元衆議院議員 武部勤氏

右：モンゴル国専任通訳 大東亮氏（モンゴル人よりモンゴル語が上手な日本人）

症例 6 例全て途中から執刀することになりかなりストレスを感じた事を覚えている。

2018 年は 8 月 25 日～9 月 1 日まで前回同様大橋病院教育支援管理部秋元課長補佐を隊長に大森病院眼科教授堀裕一先生、大橋病院手術室看護師池田麻美さん（夏季休業を利用しての参加）、私の 4 名で前年と同様に Medipas Hospital を訪れた。今回は前年の教訓を生かし、予め堀先生と私は就労ビザを取得していった。8 月 27 日から 3 日間堀先生と私は午前中に外来診療を行い、午後は白内障手術を執刀した。外来は 3 日間合わせて二人で 60 名程度診察した。外傷の患者が多い印象を受けたが、全例、受傷後数年時間が経過しており治療は困難であると説明するしかなかった。また、インドや中国、ロシア、韓国で治療（手術を含む）を受けたが言葉の問題で十分な説明を受けずに治療を受けているようで、過去に受けた治療の経過を診察してほしいのと同時にどういった治療がされているのかも説明してほしいといった要望も多かった。なかには我々が訪れた前の週に東京の医療施設で白内障手術を受けた患者も受診していた。前回は今回も優秀なモンゴル人通訳がついており患者も皆納得して帰ったようであった。また、手術は 3 日間で堀先生が 5 件、私が 4 件、合計 9 件の白内障手術を執刀した。前回は見たこともないインド製やロシア製の眼内レンズを挿入したが、様々なトラブルに見舞われたため、今回は日本製の眼内レンズを持ち込み、手術器具も前回不足していたものを日本から持って行って手術に臨んだ。そのため前回とは違って日本で手術しているのほとんど変わらない環境でストレスを感じることなく手術をすることができた。9 例全例とも問題なく終了したことは言うまでもない。

今回は診療だけでなく Medipas Hospital の職員及び近

隣の眼科医のために教育講演も行った。堀先生は角膜疾患について、私は網膜・硝子体疾患について講演した。英語でスライドを準備する必要があると考えて予め問い合わせたのだが、日本語で良いとのことであった。なぜなら英語をモンゴル語に通訳するよりも日本語をモンゴル語に通訳する方がわかりやすいとのことであった。今回の講演でも優秀なモンゴル人通訳が大活躍であった。今回の訪問を堀先生が眼科の機関紙である日本眼科学会雑誌に寄稿している¹⁾ので興味のある方は参照して頂くと良いと思う。

2 回にわたって眼科の医療協力のためにモンゴルを訪れたが、大橋病院では眼科以外に放射線科で遠隔診断が既に行われており、ネットワークを作成するために Medipas Hospital の放射線科医師が大橋病院に来院している。また 2017 年に我々と一緒に放射線部服部技師が訪れた際に MRI の操作方法を教え、その後 Medipas Hospital の放射線技師が大橋病院で研修を行っている。また臨床生理機能藤崎純技師長補佐も Medipas Hospital を訪問し腹部超音波検査の方法を伝授している。さらに循環器内科でも交流が始まり、Medipas Hospital の循環器内科医師が大橋病院で研修を行った。そしてさらに病院病理部でも病理診断向上のため Medipas Hospital の病理診断医が研修のため大橋病院へ来院している。

今後の展望

モンゴルの人口は少ないがこれから増加が見込まれており、今後発展が大いに期待できる国である。医療水準も分野によってはそれほど高いとは言えないが、今後発展が期待でき、やる気のある人材がたくさんいる事がわかった。我々はモンゴルの医療が発展するためには協力は惜しまないつもりである。しかし、Medipas Hospital のあるエルデネットはウランバートルから車で 6 時間かかり、移動で 1 日を費やしてしまうので時間ももったいなく、もっと効率的に診療の協力ができないものかと考えていたら、Medipas Hospital の病院長が眼科及び内科の教育病院をウランバートルに建設する構想を披露して下さった。この構想が実現すればより充実した協力体制が築けるものと考えられる。

2018 年 11 月 16 日に渋谷区神山町にあるモンゴル大使館に大橋病院病院長岩淵聡先生と秋元課長補佐、私の 3 名が招かれた。当日はダンバダールジャー・バッチジャルガル駐日モンゴル大使の就任レセプションが盛大に行われたが、我々の功績が認められたため招待されたものと理解している (Fig. 2)。

さらに、2019 年 2 月 19 日にはモンゴル保健省のサラングレル・ダヴァアジャンツァン保健大臣が大橋病院を訪れ丸一日かけて病院の見学をした (Fig. 3)。その際に改めて今までのモンゴル医療協力に対する感謝の言葉と、これからも協力を続けて欲しいとの言葉を賜った。もちろん今後



Fig. 3 モンゴル保健省サラングレル・ダヴァアジャンツァン大臣大橋病院を視察
 左から2人目：モンゴル保健省サラングレル・ダヴァアジャンツァン大臣
 左から3人目：著者
 大橋病院手術室にて

も医療協力を継続すると即答し、2019年8月26日～31日まで Medipas Hospital を訪問する予定であることをお伝えした。その際のメンバーは堀先生、私と今回新たに大森病院眼科准教授柴友明先生も参加する予定となっている。

おわりに

今回はモンゴル医療協力についての報告であるが、現在モンゴル以外の中央アジアの国からも医療協力の要請が来ている。高松研学長を通じウズベキスタンから要請があるが現時点でどのように協力していくか全く未定である。まずは視察に行って現地の状況を把握し、現地のニーズと我々に何ができるかを検討する必要があると考えている。モンゴルの医療協力に関してはかなり良い方向に進んでいると思うが、モンゴルは親日の人が多いため良い方向に進んでいる可能性が高い。他の国で同じようにできるかどうか

かはわからないので、身の丈を考えて出来る範囲で無理せず地道に前に進んで行こうと考えている。

今まで2回のモンゴル医療協力の準備をしていただき、特に2018年は就労ビザ取得に奔走して頂いた大橋病院教育支援管理部秋元吾郎課長補佐に深謝いたします。

本論文の要旨は2019年2月の第6回東邦大学医療センター大橋医学会、特別講演で発表した。

Conflicts of interest : 本稿作成に当たり、開示すべき conflict of interest (COI) は存在しない。

文 献

- 1) 堀 裕一. 「編集室」ところかわれば. 日眼会誌 2018; 895.

Report of Mongolian Medical Co-operation

Fumihiko Yagi

Department of Ophthalmology, Toho University Ohashi Medical Center

ABSTRACT: Mongolia is a country with the friendship, but the person who knows details is little. We visited a medical co-operation in Medipas Hospital at Erdenet, which is the third-largest city in Mongolia. The purpose of the first visit was just observation, but we performed medical examination and treatment. We obtained working visa for medical examination and treatment before the second visit. We examined around 60 patients; we thought that there were a lot of patients who did not understand the kind of medical examination and treatment they received. We operated 9 cases of cataract, for which inter-ocular lens and surgical machine was brought from Japan. We conducted lectures for the Mongolian doctors. We could work well via excellent Mongolian interpretation. Medical co-operation started with Radiology (diagnostic imaging and remote diagnostics), Gastroenterology (ultrasound exam), Cardiovascular medicine, Surgical Pathology (Path Dx), and Ophthalmology. Our third visit is already scheduled. We hope that such exchanges will increasingly become popular from now on.

J Med Soc Toho 66 (4): 212–216, 2019

KEYWORDS: Mongolia, medical co-operation, Erdenet Mine, Medipas Hospital, Central Asia